

親鸞仏教センター通信

2010.
June

2010年6月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0023 東京都文京区向丘 1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

ホームページ <http://shinran-bc.tomo-net.or.jp>

第34号

ネットワークと人間

親鸞仏教センター研究員 常 塚 聴

インターネットは現在の社会にはもはや欠かせないものとなっているが、私が始めてネットに触れたのは大学三年生の二十歳のときだった。その頃はネットワークを利用しているのは理科系の学生や教員が多く、文学部の学生でインターネットを使っているのは私を含めてまだ数人しかいなかった。そもそもコンピュータを使っている学生自体まだそんなには多くなかった。

私は以前からコンピュータには興味があったので、図書館に置いてあるネットワーク端末がインターネットに接続されていることが分かったとさっそく使用登録をし、手探り状態でネットワークの使い方を覚えていった。ある程度使えるようになったところで、自分でいくつかの文章を書き、ホームページを作ってそこに掲載した。

ホームページを作ってはみたものの、それを見てくれる人もまだ少なく、メールもほとんど来ない日が続いていた。そんなある日、メールボックスに一通のメールが届いた。何気なくそのメールを読み始めて、私はぎくりとした。

ホームページに載せた自己紹介の中に、私は自分が僧職にあると書いていたのだが、そのメールには、私にぜひ話したいことがあると書かれてあった。その方は最近家族と死別され、そのことが自分の責任であると感じて悩んでおられるとのことだった。そして、誰かに話を聞いてほしいのだと書いておられた。

自分の趣味のことや事務的なことなら簡単に返事が書けたが、このメールについてはなかなか書けなかった。簡単に返事が書けるような内容ではなかった。そのメールを受け取る人の思いを考えると、たどたどしい言葉で、いつでもメールをください、話を聞くくらいのことしか私にはできませんが、と書くのが精一杯だった。それでもその方は、後で丁寧なお礼のメールを送ってくださった。

私が大学を卒業するころには、インターネットはすっかり社会に普及し、さまざまな連絡でメールを利用することも多くなった。メールボックスにも毎日何通もメールが届くようになっていた。それでも、ほとんど毎日空だったメールボックスにあの日届いたメールほどに、深く考えさせられたメールはなかった。あのメールを受け取った時に、端末はただの機械ではなく、その向こうには生きた人間が座っていること、そしてネットワークはただ機械をつないでいるのではなく、人間をつないでいるのだと実感したように思う。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」⑭

長短自在の命

親鸞仏教センター所長 本多 弘 之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第31回、32回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第31回では、「第十六願」について、第32回では、「第十七願」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第30回からその一部を紹介する。

（嘱託研究員 越部良一）

■ 長短自在の命

本願の第十五願は、「たとい我、仏を得んに、国の中の人天、寿命能く限量なけん。その本願、修短自在ならんをば除く。もし爾らずんば、正覚を取らじ」（『真宗聖典』17頁、東本願寺出版部〈以下、『聖典』と略記〉）と。阿弥陀如来が仏に成るなら、その国の中の衆生はみんな寿命が無限であるのだと、こういう願を立てた。ところが、その後ろに「その本願、修短自在ならんをば除く」と。「修」は、おさめるという意味もありますが、長いという意味がある。だから、「修短」は長短ということです。ここの「本願」は、この場合は、一応は、浄土に生まれた人天の本願です。浄土に触れた衆生の根本の願い。その本願において、長かったり短かったり自在であるというものは除くと。

除くといわれると、修短自在でない存在もあるのかとも思うのですが、どうもそうではない。みんな修短自在を与えられる。だから、「除」といっても排除という意味ではないので

す。そうではなくて、除というのは、何かそこで存在の自覚に目覚めて、自らが自分で選んで立ち上がる。そういう意味がある。つまり、おもしろいと思うのですが、無限に生きてもよいよという世界は、実は、どんな短い命でも、無限の意味があるということでもある。われわれのこの有限の命の中だと、比較相対して、少しでも長いほうがよいという、そういう考えなのですが、無限大の浄土の中では、自由自在である。つまり、修短自在ということは、人生の長い短いの問題ではないよということを、どこかで言い当てているのではないかと思います。だから、第十五願は、浄土を建立して衆生を招き入れるのだけれど、浄土に触れるということは、みんな浄土を離れて、短い人生で自由にできるということでもあるわけです。

浄土に往かなければたすからない。無限な命が欲しいから、浄土に往きたいというのだけれど、往ってみたら、あなたはもう無限の命をもらったのだから、自由に、自分の命を短くしてよい。自由に出て行ってくださいと言われて、わかった、出て行きますと言って出て行けるのが、第十五願である。おもしろい話だと思いますね。

■ 一念の歩み

つまり、有限な努力ということ言えば、時間は無限大に必要になる。けれど、無限大の願心が衆生にはたらきかけたいということになれば、本当は、われわれの時間の中にはおさめきれないようなはたらきが、一瞬にして来る。譬喩で言うと、ものすごい速さで走っている短距離

走をしている人を、早いシャッターで、ぱっと撮ると、止まったごとくに見える。止まったごとくに見えるけれども、本当はものすごいスピードで走っている一コマである。そのように、われわれの時間の中に、無限大の時間をかけるような課題が切り取られて、一瞬にして与えられる。

ちょっとわれわれには、それは信じ難いのです。やっぱり時間をかけてやらなければいけないのではないかと。よいですよ、やってください。無限にかかりますよ。でも、そうではない道もあるのだと。有限から無限に行くのではない、無限が有限に来る。だから、「修短自在」ということは、浄土に触れたら、極端に言えば、一瞬でよいということです。無量の寿命がある世界にも触れるなら、一念一念の中に、無量の寿命の意味が来る。長く引き延ばして無限になるのではない。そういうものに触れないと、何か、われわれの人生は、いくら生きても、何年生きても足りないと思えないわけです。

凡夫が、少し訂正して仏に成っていくと考えたと、自力になるわけです。それで凡夫でよいのだと開き直ったら外道に墮するわけです。念仏ということは、念仏の一念に無限大の功德が来る。では、一声でよいのかといたら、いや、一声でよいとはいわない。縁のある限り称えなさいと。無限の功德が来るのなら、無限を二倍しても三倍しても功德は同じでないか。いや、その時その時が勝負なのだ。その時、その時に、全部が来ることを生きる。だから、一念に全部がありながら、一念が歩む。一念が終わらない。

■ 念仏はいつでも出直し

私は、頑固で、愚かで、愚かなくせに何か理屈ばかりこねているところがあるのですが、でも、こうやって長い間本願の教えを聞いていますと、有限な人間の自我がらみ、我執がらみの、自力がらみのものの見方、有限の自我を立てて、自我でどこまでも行けるという発想は間違っている、どこかで、それは本当は駄目

なのだと気づかされる。これは、本当に不思議なことだと思います。そうすると、南無阿弥陀仏の一念に無上功德を感じるという力が来るのです。いや、俺は無限の時間がかかってもやる、七度生まれ変わってもやるなどと頑張っているうちは、この功德に遇うことはできない。そういうことではないかと思うのです。

自由自在ですよ。浄土の命に触れるということは、短いも長いも、どちらでもよい。無限なる光に帰ると、そこにもう無限に歩むということがあるわけです。一念一念、愚かな身において、無限の功德をいただいていく。「歩む」というと、だんだんよくなるのかというと、一向に変わらない愚かな身を歩むわけです。

もう何年前ですけど、念仏好きの聞法者がいて、その方と同席したときに、その人が私に、おまえは駄目だな、出直してこいと。はい、わかりました、出直しますと。いつでも出直しなんですよ、念仏というのは。だんだん立派になるのではないのです。それでは、何のために称えるのかというようなものですけども、何のために、「ために」が無くなるのが念仏です。一念に無限の功德をいただく。それが、菩薩道がここに成就するということである。そういうことが、この第十五願が暗示している問題ではないかと思うのです。

(文責：親鸞仏教センター)

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開（無料）で開催しています。

記

日時：2010年6月 9日(水)午後6時30分～9時
7月 1日(木)午後6時30分～9時
8月20日(金)午後6時30分～9時

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック

JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：『真宗聖典』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000

ご希望の方は、下記（京都・東本願寺出版部）まで。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp>

「聞」は、聖教をひろく、おおく、きき、信するなり。「持」は、たもつという。たもつというは、ならいまなぶことを、うしなわず、ちらさぬなり。「浄戒」は、大小乗のもろの戒行、五戒八戒、十善戒、小乗の具足衆戒、三千の威儀、六万の齋行、梵網の五十八戒、大乘一心金剛法戒、三聚浄戒、大乘の具足戒等、すべて道俗の戒品、これらをたもつを「持」という。かようのさまざまな戒品をたもてる、いみじきひとととも、他力真実の信心をえてのちに、真実報土には往生をとぐるなり。みずからの、おのの戒善、おのの自力の信、自力の善にては、実報土にはうまれずとなり。

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』五五一―五五二頁)

語 註

①「自力」『親鸞仏教センター通信』第25号参照。

試訳をめぐって

「原文」かようのさまざまな戒品をたもてる、いみじきひととも、他力真実の信心をえてのちに、真実報土には往生をとぐるなり。

「現代語訳」このようなさまざまな戒をたもっている立派な人びとでも、阿弥陀如来の本願の用らきによって恵まれる真実の信心を得てこそ、如来の本願が用らいている世界が我が身のうえに開かれ、そこで初めて真実に生きることができるのである。

えらび分けることなく、どのような人も差別しないというのである。「不簡多聞持浄戒」の「多聞」は、聖教を広く多く聞いて、信ずるということである。「持」は、たもつということ。習い学ぶことを忘れず、心にしっかり留めておくことである。「浄戒」は、大乘・小乗のさまざまな戒のこと。すなわち、五戒・八戒、十善戒、小乗の具足衆戒、三千の威儀、六万の齋行、梵網の五十八戒、大乘一心金剛法戒、三聚浄戒、大乘の具足戒など、出家・在家を問わず全ての仏教徒がたもつべき一切の戒をさしている。これらの戒をたもつことを「持」というのである。このようなさまざまな戒をたもっている立派な人びとでも、阿弥陀如来の本願の用らきによって恵まれる真実の信心を得てこそ、如来の本願が用らいている世界が我が身のうえに開かれ、そこで初めて真実に生きることができるのである。自らの努力や能力でそれぞれが戒をたもつこと、つまり、わが身を善しとし、わが心を善しとすることによつては、本願が用らいている世界を生きすることはできないというのである。

「往生をとぐる」ことは如来の「果遂の誓い」である。すなわち、「往生」とは賜るものであつて、信心とともに本願の用らきに依拠するのである。

ところで、「真実報土に往生を遂げる」ということは、教学上一つのテクニカルタームとして扱われてきた。したがつて、現代語訳といえども、「浄土へ往生を遂げる」、あるいは「浄土へ往生生まれる」と定訳されてきたのである。しかし、それらの言葉がもつ実体的イメージ、それ以前に「浄土」「往生」が現代に響く言葉かどうか。

試訳のポイントは「主体と環境の一致」である。本願の用らく世界が開かれ、その開かれた世界を主体的に生きるようになるというのを、先述したことを勘案しつつ現代的な表現で何とか意味を表そうとの試みである。

「往生」には「真実に生きる」という試訳が施された。

(訳・語註・親鸞仏教センター)

『anjali』第19号および

『現代と親鸞』第20号を刊行

このたび、『anjali』第19号(写真上)、並びに『現代と親鸞』第20号(写真下)を刊行しました。

『anjali』第19号では、総合研究大学院大学教授の長谷川眞理子氏、東京大学名誉教授の大井玄氏、ノンフィクション作家の佐野眞一氏、臨済妙妙心寺派神宮寺住職の高橋卓志氏、中京大学教授の平川宗信氏、元富山大学学長の小澤浩氏、駿河台大学教授の水尾順一氏、絵本作家の長谷川根子氏、日本女子大学教授で森田療法研究所所長の北西憲二氏など、十名の専門分野の方々に、現代社会の課題や最先端での苦闘について、ご執筆いただいています。

一方の『現代と親鸞』第20号では研究論文のほか、「現代と親鸞の研究會」から慶應義塾大学教授の金子勝氏、日本女子大学教授で森田療法研究所所長の北西憲二氏の問題提起と質疑。「清沢満之研究會」から毎田仏教センター所長の羽田信生氏の講義と質疑。「英訳『教行信証』研究會」から武蔵野大学教授のケネス田中氏の講義と質疑。「現代の諸課題と対話する研究會」から元同志社大学教授の森孝一氏のインタビュー内容。「親鸞仏教センターのつどい」から埼玉大学名誉教授の畔峻淑子氏と本多弘之氏の講演。さらに、「親鸞思想の解明」から本多所長の問題提起(四講座分)を掲載しています。

anjali



現代と親鸞

第20号

親鸞仏教センター

『聖典』の試訳（現代語化）

「えらばず」「きらわす」。二つの言葉を対にさせ、親鸞は繰り返す。その背景に私は、「よきひと」と仰いでいかれた師、法然上人の姿があったことを想う。

「ただ、後世の事は、善き人にも悪しきにも、同じように、生死出すべきみちをば、ただ一筋に仰せられ候いし」

この法然が伝えてくださった「生死出すべきみち」を親鸞もまた、ひたすらに聞き、ただ一筋に説いていかれたのだろう。

一人人間はどうしたって、優れたものを好むものである。たとえ、劣ったものに身を添わそうとも、その裏には三元化という拭い去れない価値観が張り付いている。だから、先の言葉も嫌悪感や同情の類で読んでしまう。しかし、ここでは単に、劣るものを嫌わずというのではなく、優れたものをも、「えらばず」「きらわす」というのである。

それはわれわれの価値観ではない、「如来の眼」からの表現なのである。

（嘱託研究員 法隆誠幸）

『唯信鈔文意』試訳 ⑩

原文

「不簡貧窮將富貴」といふは、「不簡」は、えらばず、きらわすという。「貧窮」は、まづしく、たしなきものなり。「將」は、まさにという、もてという、いてゆくという。「富貴」は、とめるひと、よきひとという。これらを、まさにもてえらばず、きらわす、浄土へいてゆくとなり。「不簡下智与高才」といふは、「下智」は、智慧あさく、せばく、すくなきものとなり。「高才」は、才学ひろきもの。これらをえらばず、きらわすとなり。「不簡多聞持浄戒」といふは、「多

現代語訳

「不簡貧窮將富貴」の「不簡」は、えらび分けることなく、差別しないという意味である。「貧窮」は、貧しく、生活に苦しんでいる人のことである。「將」は、たしかに、とりもなおさずということ、また、連れてゆくということである。「富貴」は、裕福に暮らす人、身分の高い人という意味である。これらの人びとを、決してえらび分けることなく、差別することなく、浄土へみな連れてゆくというのである。「不簡下智与高才」の「下智」は、智慧が浅く、視野が狭く、知識・経験の少ない人のことである。「高才」は、才能が豊かで学識の広い人のことである。これらの人を

親鸞仏教センターの動き

（2010・2014）抄出

■2010年

- 2・1 人事発令（マーク・L・プログラム客員研究員が再任）
- 2・4 第18回英訳「教行信証」研究会
- 2・4 第31回（通算第82回）連続講座「親鸞思想の解明」（東京国際フォーラム）
- 2・5 第32回清沢満之研究会
- 2・12 親鸞聖人ご命日のつどい
- 2・12 第46回「唯信鈔文意」研究会
- 2・26 第22回鈴木大拙訳「教行信証」の考究
- 3・1 機関紙「親鸞仏教センター通信」第33号を発行
- 3・2 第17回英訳「教行信証」再版編集会議
- 3・3 第23回鈴木大拙訳「教行信証」の考究
- 3・5 第5回研究員と読む公開輪読会「『精神主義』の思想を問い直す」「我信念」を中心に①3/5②3/12③3/19（文京区・東京大学仏教会館）
- 3・9 第93回清沢満之研究会
- 3・9 第32回（通算第83回）連続講座「親鸞思想の解明」（東京国際フォーラム）
- 3・15 第2回親鸞仏教センター研究交流サロン「清度と平等の誦唱：布教と識字…『笑う親鸞』と『猿蓑法師連如上人』作曲家・指揮者…伊東乾氏、早稲田大学理工学部教授…三輪敬之氏、東洋英和女学院大学人間科学部教授…西洋子氏（東京国際フォーラム）
- 3・30 第18回英訳「教行信証」再版編集会議
- 3・30 第14回英訳「教行信証」研究会
- 3・31 第47回「唯信鈔文意」研究会
- 4・1 人事発令（春近敬研究員、花園一実研究員、山本伸裕嘱託研究員、三浦雅彦嘱託が発令、田村晃徳、大谷一郎が嘱託研究員として再任）
- 4・13 親鸞聖人ご命日のつどい
- 4・13 第24回鈴木大拙訳「教行信証」の考究
- 4・19 第8回「親鸞仏教センターのつどい」記念講演「人間の倫理と社会の倫理」早稲田大学教授・竹田青嗣氏、「末法」と現代的罪惡「親鸞仏教センター」所長・本多弘之（千代田区・学士会館 本館）
- 4・23 第48回「唯信鈔文意」研究会
- 4・27 第15回英訳「教行信証」研究会

現代と親鸞の研究会・第34回

道徳と法について

立教大学文学部教授 河野哲也



河野哲也 氏

2009年10月9日、メトロポリタンプラザ（豊島区）において、立教大学文学部教授の河野哲也氏をお迎えして「現代と親鸞の研究会」を開催した。倫理とは、道徳とは何かという問いは、社会全体が揺れ動いている現代において、今まさに改めて考えるべき問題として私たちの前に横たわっている。今回は、社会における道徳と法、善悪のとらえ方について、河野氏に哲学的心理学の観点から語っていただいた。ここでは、その一部を紹介する。

(研究員 春近 敬)

■ 道徳と法

現代の日本では、道徳と慣習が混同されているという現状があります。まず、申し上げておきたいのは、「大人のルール」イコール「道徳」ではないのだということです。心理学者のコールバーグは、道徳性の発達過程を三段階で表しています。第一の「慣習以前のレベル」、第二の「慣習的レベル」、そして第三の「脱慣習的レベル」です。第一のレベルは、自身の利益や欲求に基づいた利己的行為の段階です。第二のレベルは、自分の所属する集団の慣習や規則を、ほぼ無批判に受け入れる段階です。第三のレベルは、道徳的価値や原理を、自己利益からも所属集団の慣習からも独立して定めようとする段階です。組織の外側から組織の行為の妥当性を考える、というようなことです。現在の組織的不正や不祥事の問題は、この「脱慣習的レベル」の欠落から生まれます。第二段階にとどまり、組織の秩序を維持してルールに忠実で

あることこそが道徳的に正しいと考えるのです。

しかし、宗教者や、聖人と呼ばれるような人たちは、しばしば法に背いてきました。キング牧師は黒人集会の禁止という法を破りましたし、ネルソン・マンデラもアパルトヘイトによる法を破りました。この第三段階は、いわば立法者の立場と言えます。この段階に達して、初めて道徳的なレベルが高まるのだと思います。

カントは法と道徳を強く結びつけ、道徳とはルールを守ることであるとしました。ユダヤ・キリスト教の伝統では、道徳は神の与えた法として考えられていました。日本でもカント主義の強い影響からか、道徳とルールの遵守を関連させる傾向にあります。法とは、主権者の命令です。しかし、実際のところ法には道徳と無関係であったり、反道徳的であったりするものもあります。つい最近まで存在したらいい予防法や北海道旧土人保護法などはその例です。死刑というものも、やはり非常に不道徳であると思います。また、道徳と法がイコールの関係になってしまうと、道徳的な人間関係に常に国家が介入することになります。つまり、何か悪いことをした際に、「その人に対して悪いことをした」という論理が「社会秩序に対して悪いことをした」という論理にすり替わってしまうのです。

■ 事例ベースの倫理

法は、とるべき行動を演繹的に示すことはできません。むしろ、特定の行動をとる者を排除するために存在します。私たちが善い行動に導くものではなく、標準的な行動の型を示してその型にはめ、イレギュラーな存在を排除するものであると言えます。道徳と法は、切り離して

考える必要があります。それでは、道徳とは、すなわち善悪とは一体何であるのでしょうか。私は、意図的になされた他への利益が「善」であって、不利益が「悪」であると考えます。ここで言う利益とは、その人の潜在能力を増大させ、行動の可能性を拡大するものであるということです。死を与えるという行為は、すべての可能性をゼロにしてしまうのですから、もっとも悪い行為であると言えます。そして、善悪とは主観的なものではありません。これは、その行為が利益か不利益かを決めるのは、行為をした当人ではないという意味です。例えば医者が高かれと思ってした行為でも、そのことで患者の状態がかえって悪くなれば、それは善い行為であるとは言えないのです。それから、善悪は^{客観的}に決定されます。その場限りの快や不快というようなものではなく、もっと長いスパンでの結果によって判断されます。善悪は相対主義でもないし、絶対主義でもありません。客観的な個別主義だと言えます。

法は言語的に表現されるものですから、どうしても一般化されます。カントは、あらゆる学問を物理学をモデルに考えていました。したがって、法がどのような状況でも一律に当てはまると考えました。しかし、例えば医療や歴史や経営などは一回限りで反復しない現象であり、状況により千差万別です。そのような個々の事例を、単純な法則性でとらえることは適当ではありません。道徳にも同じことが言えます。同じタイプの行為が、違った状況で、違った人物に、違った人生の局面で、違った効果をもたらすのです。

以前、電車で座っていたら、目の前に杖をついたお年寄りが来ました。一般的に言えば、ここでお年寄りに席を譲るのが善い行為とされます。しかし、立ち上がったところ、その方は「すみません。一度足を曲げると立ち上がるのが辛いので、このまま立たせていただけませんか」と言われました。もっと言えば、「殺してはならない」「延命処置を施すべき」という法則ですら、状況によって「道徳的に正しい」行為が変わってしまうこともあります。ここまで

究極的な命題でも、道徳とは条件次第なのです。そのような細かい事例までいちいち気にしてられない、と言われるかも知れません。しかし、医療とか看護とか教育とか、人と濃厚に接しなければならない場面というものは、まさにこのようにして向かい合わなければ成り立ちません。これらの現場が事例を中心にして物事を考えなければ先に進まないのと同じように、道徳もまた、法則ではなく事例をベースにして考えられるべきなのです。

(文責：親鸞仏教センター)

※河野哲也氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第21号(2010年12月1日号)に掲載予定です。

河野 哲也(こうの てつや)立教大学文学部教育学科教授 1963年、東京都に生まれる。慶應義塾大学文学部(哲学科哲学専攻)卒業。87年、慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程(哲学)修了。90から91年、Université Catholique de Louvain 哲学高等研究所、ベルギー政府給費留学。93年、慶應義塾大学大学院後期博士課程単位取得修了。95年、博士号(哲学)取得。同年、日本学術振興会特別研究員(国立特殊教育総合研究所)。97年、防衛大学校人間文化学助教授。02年、York University (Toronto, Canada) 客員研究員。04年、玉川大学文学部人間学科准教授を経て、現在、立教大学文学部教育学科教授。専門は心の哲学、身体論、理論心理学、応用倫理学(ビジネス倫理、科学技術社会論)、倫理教育。著書に『レポート・論文の書き方入門』(慶應義塾大学出版会)、『メルロ＝ポンティの意味論』(創文社)、『エコロジカルな心の哲学：ギブソンの実在論より』、『環境に広がる心：生態学的哲学の展望』(以上、勁草書房)、『心』はからだの外にある(NHK ブックス)、『善悪は実在するか：アフォードランスの倫理学』(講談社メチエ)、『暴走する脳科学』(光文社新書)など多数。なお、『aījali』第17号に「善悪はどのようにして決まるか」をご執筆いただいている。



『現代と親鸞の研究会』(豊島区の「メトロポリタンプラザ」で)

■ 第2回「親鸞仏教センター研究交流サロン」を開催 (2010年3月15日)

親鸞仏教センターは、2001年7月の設立以来、多くの有識者の方々と交流・対話を重ねてきたが、当センターと有識者の方々との間のみならず、有識者相互間の更なる研究交流をめざし、さる3月15日、東京国際フォーラム（G棟610）を会場に第2回「親鸞仏教センター研究交流サロン」を開催した。

今回は、「清浄と平等の誦唱…布教と識字：『笑う親鸞』と『猿蓑法師蓮如上人』」をテーマに、作曲家・指揮者の伊東乾氏から発題していただき（写真上）、早稲田大学教授の三輪敬之氏と東洋英和女学院大学の西洋子氏のコメントをいただいた後、約30人の参加者で意見交換した。

音楽の仕事に従事してこられた伊東氏の発表の趣旨は、「音」及び「音響効果」を軸とした、布教、宗教的な伝達への接近にあった。識字率が99パーセントを超えるとされる現代の日本の状況からは考えにくいことであるが、親鸞聖人や蓮如上人在世当時においては、文字が判読できたのはきわめて少数の知識人のみであった。したがって、文字の読めない圧倒的多数の庶民層を対象とした布教は、当然、「文字」よりも「音声」に基づいたものであったはずであると伊東氏は言う。そのことはまず、平易な「和讃」の音読、また仏前芸能としての猿蓑といった布教の手段、方法に表れている。しかしそれだけではなく、「説教の場である寺院の建築構造等を分析することによっても、いかに音響効果が機能的に用いられていたかをうかがうことができる。説教を音響効果によって捉え、寺院を音響の機能的な場として捉える」氏の視点は、聞法における「音」ということの意味を新たな形で示唆するものであった。

氏は最後に、「笙」という楽器を手に（写真下）、「宮商和して自然なり」という親鸞聖人の和讃を引用され、「本来不協和音となる二つの異なる音が、笙という一つの楽器の中で共に発音されることで別の一つの倍音となって現れる」という、音響効果に基づいた独自の解釈を語られた。

※「親鸞仏教センター研究交流サロン」の講演記録は、「現代と親鸞」に掲載の予定です。



親鸞仏教センターの発行物をご自宅にお届けします。

会員
募集中!

年会費1,000円（送料込）で、情報誌『アンジャリ（anjali）』（年2回）と機関紙『親鸞仏教センター通信』（年4回）をご自宅にお届けします。ぜひ「アンジャリの会」にご入会ください。知人や友人等のご紹介もお受けします。また、バックナンバーのご希望も承ります。

■申し込みと問い合わせは、

親鸞仏教センター内「アンジャリの会」T係
TEL 03-3814-4900
FAX 03-3814-4901
E-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

まで。

●センター新スタッフの紹介

研究員 春 近 敬

1978年埼玉県生まれ。早稲田大学第二文学部思想・宗教系専修 卒業。
大正大学大学院文学研究科宗教学専攻博士課程満期退学。元親鸞仏教センター嘱託研究員。

研究員 花 園 一 実

1982年東京都生まれ。日本大学芸術学部映画学科卒業。大谷大学大学院文学研究科博士課程満期退学。

嘱託研究員 山 本 伸 裕

1969年山口県生まれ。明治大学政治経済学部（政治学）卒業、東洋大学大学院文学研究科博士課程（仏教学）単位取得退学、東京大学文学部思想文化学科（倫理学）卒業。元親鸞仏教センター研究員。

嘱 託 三 浦 雅 彦

あ と が き

当センター訳・解説『現代語釈異抄—いま親鸞に聞く』（朝日新聞出版）が、重版（三刷）され、本多所長が監修された『知識ゼロからの親鸞入門』（幻冬舎）も再版された。うれしいことである。「私たちのかかえている問題の深さに応じて、輝きを変えることが『釈異抄』の魅力である」、「親鸞の思想が、現代の人々にも要求されているのは、何よりも親鸞という人が、人間としての自己を徹底的に正直に、見つめ続けたということにある」（両書の「あとがき」から）。個人の苦を人間の苦として見据えていく思想、信念を現代に開いていく場と時を大切にしていきたい。（木曾）▼さまざまな先生のお考えを拝聴、拝読する機会をもったいくとも与えられる。おおよそ、私の語彙の少なさから難解だと思う。しかし、時として語られる言葉が難しいのではなく、聞く私の耳が難しいものだと感じることもある。ご本尊には色もかたちも、においもないといわれる。至極シンプルなることを難しく聞いているのは私だったと感ずるのである。世界中の人びとが、さまざまな表現方法をもって生活してい

る。その根底に流れるものを、先祖は750年以上前に感得され、そのことが今日まで伝灯されていると思うと、人類に捧げる教団の一員であることが問われつつ、お迎えする御遠忌は恐悦であるとあらためて思う。（大江）▼「お一人さま」は不思議な言葉だと思っていた。自立して、楽しく、個人として尊重されているような、それでいてどこかちょっと持ち上げられたような、不思議な雰囲気を感じていた。そんな話をしていた折、こんな話が出た。「お一人様っていうのは、お金を払える人が「様」なので、お金がなかったら様はつかないよね。お客様である以上はお一人様だけど、お金が払えなかったらただの一人よ」と。都合のいい存在だから、一人に「お」や「様」までつけているのか。都合が悪くなったら…見向きもされないのかな。それは嫌だな、変だな、そうは思いながらも、自分を振り返ればそうも言えない。損得、都合、感情、そういうものをどうしても優先し、周囲の人でさえも都合のいいときだけ「お一人様」としてみている自分がいる。寂しいなあ。「お」も「様」もつかなくてもいい、「一人」として目の前にいる人を尊敬できる、そんな人になりたいと思う。（鈴木）